

MGU Chapel Letter

—第 54 号 2025 年 10 月 1 日— 発行：大学宗教センター

* 2025 年度 年間聖句 *

「あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯（ともしび）。」

詩編 119 編 105 節



10 月の大学礼拝スケジュール

【12 時 10 分～12 時 30 分 礼拝堂にて】

- ・ 10 月 1 日（水） 加藤 秀久 （仙台南伝道所牧師）
- ・ 10 月 3 日（金） 清水 禎文 （教育学部教授）
- ・ 10 月 6 日（月） 金丸 真 （仙台長命ヶ丘キリスト教会牧師）
- ・ 10 月 8 日（水） 栗原 健 （大学宗教センター長）
- ・ 10 月 15 日（水） 松本のぞみ （日本基督教団東北教区巡回教師）
- ・ 10 月 17 日（金） 津村 大三 （聖光学院高等学校宗教部長）
- ・ 10 月 20 日（月） 瀬谷 寛 （仙台東一番丁教会牧師）
- ・ 10 月 24 日（金） 長谷部 弘 （学長）
- ・ 10 月 27 日（月） 佐々木哲夫 （学院長・宗教総主事）
- ・ 10 月 29 日（水） 荒井 偉作 （名取教会牧師）
- ・ 10 月 31 日（金） 松本 周 （一般教育部教授）

～ 10 月 10 日（金）は大学祭準備、13 日（月）は祝日、
22 日（水）は土曜日の振替授業日のため礼拝はありません。～

【連絡先】 宮城学院キリスト教センター

TEL：022-279-9558

Email：christ-c@mgu.ac.jp

✦ 「竹パイプオルガン」が語るもの ✦



宮城学院の礼拝堂に入ると、最初に目につくのが正面にそびえるパイプオルガンですね。中世の昔から、オルガンは神を賛美するための楽器として教会で用いられて来ました。やはり礼拝には、オルガンの荘厳な音が欲しいです。

オルガンはいつ頃から日本にあるのでしょうか。答えは1579 年です。イエズス会の宣教師ヴァリニャーノが到着した際、2 台のオルガンが初めて日本にもたらされたとされています。この楽器はたちまち日本人の間で人気となり、1590 年代には日本国内でもオルガンが作製されるようになったようです。この国産オルガンのパイプは、ヨーロッパのもののように金属製ではなく、竹の筒で出来ていました。西洋には無いユニークな造りとあって、ポルトガル人が珍しがって見物に来たとの記録があります。

この「竹パイプオルガン」は、古楽器製作家の平山照秋氏によって 2009 年に復元され、YouTube 動画でその音色を聴くことができます（ぜひ見てみて下さい）。材質が竹であるため、非常にやわらかな、パンフルートのようにかわいらしい音質になります。高山右近のような精悍なキリシタン武将たちが、このような音色と共に礼拝をしていたと想像すると、なんだかほほえましいですね。

最近、日本社会では外国人に対する風当たりが強くなって来ています。このような中で、「外国人が増えると伝統的な日本文化が侵食されてしまう。日本の良さが失われる」といった声が、しばしば聞かれるようになりました。

しかし、これはおかしい話です。「伝統的な日本文化」とされているものの多くは、日本の文物に中国・朝鮮、南島、西洋などの文化が混じり合い、長い年月をかけて徐々に形成されて来たものです。この文字も中国の漢字と、それをアレンジした仮名から出来ていますね。和食にも、天ぷらのように西洋起源のものが自然に入っています。

外国のものから心に触れたものを取り入れ、アレンジしながら変化して来たのが日本文化です。その中で、姿を変えつつも変わらない部分、共通している要素があれば、それこそが日本文化の「核」ということになるでしょう。いたずらに変化を恐れるよりも、「その『核』とは何だろう」と考え、学ぶことが大切ではないでしょうか。竹オルガンのクリエイティブな音は、「核」の姿を映しているようにも思えます。（栗）